



## 「研究雑誌の現状について」

平野 勝臣（統計基礎研究系）

研究雑誌の現状について述べてみたい。

「あの雑誌はもうとっていません」と大学の友人から聞いて久しくなる。雑誌の価格が上がったり、図書予算が少なくなり雑誌購入を打ち切ったという話を何人もの人から聞いた。教員個人の研究に関連したすべての雑誌を図書室で閲覧することは不可能になった。各教員が必要とする雑誌を集めれば極めて多くなり、それをすべて購入することは予算上できない。必要性の高い安価な雑誌が定期購読される。インターネットで調べコピーサービスで取り寄せるなどしている。また統計科学分野の雑誌の閲覧のために統計数理研究所にくる人は少なくない。

雑誌購入が減れば出版社は価格を上げる。購入者は予算を有効に使うためいくつかの教室で購入していた雑誌を機関で一冊にしたり、コンソーシアムをつくり出版社から一括して電子ジャーナルとして閲覧できるようにし、図書予算の有効使用に対応する。電子ジャーナルの閲覧が増えて、それをふくめる形で毎年雑誌の購入価格は上がり、購読数が減少するという循環が起こっている。見逃してはならないのは、出版社による出版は商業活動であり、この様な状況下では価格を上げる。出版社間の競争が減ればなおさらしやすくなる。これに比べ学会などによる出版は学会費などでまかなわれ安価である。しかし電子的な対応は商業出版界に比べ遅れている。学会系の出版と商業出版の特徴である。

研究雑誌の多くは欧米から発信されている。欧米の商業出版界では、昔の名前は残っていても事実上の統合されていたり、吸収合併が盛んに行われ寡占化がすすんでいる。大手商業出版社による寡占化に対抗し、SPARC運動が欧米で起こる。価格を抑え科学の発展に寄与したいとの出版社もあろうが、出版物を高額にしても一定部数が売ればそれでよいとする経営方針の出版社もあると聞く。SPARCの動きに関連し、この出版社の経営方針は受け入れられないので雑誌の査読は断るとの研究者もでる始末である。

一方、欧米では評価が当たり前になり、また日本では評価の時代に突入している。より“よい”雑誌に掲載を求め、論文数の増加が心理的に強く働いてくる。また雑誌の需要が増え、出版社も新しい雑誌の出版に対応する。新しい雑誌では相互のリンクを可能にするなど、出版の現代技術を最大限に生かし、冊子体にはできない創意工夫をしている。過去に影響されることなく新しい体制で出版したいこともあろう。収益をめざし創意工夫する商業出版は淘汰か生き残るかである。

ところで、私の関わる研究分野では主に研究結果は論文に定理としてまとめられ、その形式は昔と変わらない。式は簡潔にまとめられ、美しければなおよく、後で誰が試しても同じ結果を導く。もとよりそれは紙に書かれている。現在では数式処理ソフトが発達し、研究結果を紙に書くとすれば、数十頁になったりすることがある。紙に書かれた式を他の人が検証するとすればそれは現実的ではない。もちろんそのような結果は雑誌には掲載してもらえない。他の人の検証が不可能ではないが著しく困難なら掲載する必然性がない。しかしこれがよい研究結果であれば価値を正當に評価し、何らかの形で記録に残すよう意識を変える必要がある。

冊子体には冊子体のよさがあり、酸性紙の問題があっても寿命は長く何よりも安心である。一方で計算機時代の新しいタイプの研究結果がある。問題と考察と計算手順を記述し、結果式には必ずしもこだわらず、計算手順から他の人が検証すればよい。そして紙による論文形式よりももっと情報量が多く、豊かにさまざまな可能性を含めた表現ができる。雑誌に掲載されない結果をホームページに載せている人もいる。ただしこれは寿命が短いし、業績と主張しても受け入れられにくい面がある。しかし紙と紙を超えた発表が並立する時代にきており、評価によってその可能性をせばめてはならない。評価者にはその価値を正當に評価する能力が求められるし、できなければできないと評価者が評価される。